

シラー『ドン・カルロス』を読む 他者の壁、思い込みと読み違いの悲劇

武田 智孝

はじめに

『ドン・カルロス』については、父子葛藤を軸とした家庭悲劇、政治劇、思想劇といった読みが大勢を占めるが、そういう視点からでは観念的な論に傾きがちで、この芝居に多く見られる陰影に富んだ場面や会話の機微や謎の部分にじゅうぶん注意が向けられないまま読み過ごされてしまうおそれがある。¹

登場人物たちはめいめい自らの思い込みに導かれ、読み違いをやり、多くの場面で、すれ違いや、激しいこすれ違い、行き違いを引き起こす。それがこのドラマの見どころの一つである。どの人物もそれぞれ異なる状況に置かれ、それぞれの思いや情念や情熱や悩みを抱え、それぞれ異なる思惑に駆られているのだが、その彼らにとっても対する相手は皆

¹ Koopmann, Helmut. Don Carlos. In: Interpretationen Schillers Dramen. Hrsg. Von Walter Hindrer. Stuttgart. 1992 と Alt, Peter-André. Schiller Eine Biographie Bd.1.1759-1791 München 2009(2000) はいずれも家庭悲劇の側面を強調し、Safranski, Rüdiger. Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus. München 2007(2004) は表題の示す通り主として理念劇の側面から論じている。Luserke-Jaqui, Matthias. Schiller Handbuch Leben- Werk-Wirkung. Stuttgart-Weimar 2011 は Handbuch の性質上、いずれの面にも均等に目配りしているが、読み違いを疑わせる記述(S.105)もある。総じてドイツ人学者の論は抽象的、理念的でテキストの一字一句に対する目配りの点で物足りなさを感じさせる。日本人は読むのに時間がかかるうえに、無意識にでも日本語とのすり合わせをやるので、ドイツ人の気付きにくい箇所にも注意が及ぶ可能性がある。これがわれわれの強みかもしれない。日本では今世紀に入ってから『仮面と遊戯 フリードリヒ・シラーの世界』(鳥影社 2001)所載の栗林澄夫「〈意味の物語〉としての歴史劇を超えて 〈ドン・カルロス〉の重層性」がある。だが「作品の梗概」を見ると、ポーザがカルロスから預かる紙入れに関して「やがて王の手に渡るこの書類挟みの内容によって王は激怒し、ポーザにカルロスの逮捕を命じることになる」(97 頁)などと目を疑うような要約がなされている(拙論 58 頁参照)。拙論の題をあえて『ドン・カルロス』を読む』としたしだいである。長大で上演の難しいこのドラマは発表当初から Lesedrama と呼ばれて来た。なお日本独文学会文献情報データベースにはこの作品に関する論文は 22 件の登録があるが、拙論執筆時点で URL が付いているのは 1 件のみ、それも何故かアクセスできない。

めいめい、自分とは異なる様々な状況におかれ、それぞれ異なる思いや情念や情熱や悩みを抱え、それぞれ異なる思惑に駆られて生きる他者^{たしや}なのである。情念や情熱や悩みが深ければ深いほど、めいめいが熱い期待や思惑を抱いて相手に近づくのであるが、相手も独立した人格であるからにはそれぞれの情念や悩みを抱えているので、めいめいの期待や思惑は思い込み、思い違いとなり、出会いの場は衝突でなければ、すれ違いや行き違いの場となる。期待や思惑は必ず他者の壁にぶつかるが、このドラマでは真っ向からの対決よりも、すれ違い、こすれ違いの方が圧倒的に多い。そういう場面にこそこの劇の魅力があるのではないかと思う。拙論では〈他者の壁〉という視点からこのドラマを論じたい。シラーは情熱的理想主義者だが、人間や人間関係を冷静に観察するリアリスト、モラリスト(人間性探究家)でもあり、そういうシラーの方に筆者の関心はより強い。

拙論でとりわけ目指したいと思うのはテキストに何ヶ所か仕掛けられている謎の部分の解明である。たとえばドラマの終盤近く第5幕第3場で、カルロスを救うためにはこれしかないと思い込んでポーザが書いた偽手紙だが、内容を聞かされた時のカルロスの意外な反応、あれはポーザにとってまさしく他者の壁だが、われわれにも謎である。王妃を恋しているのはカルロスではなく自分ポーザであり、その罪をカルロスに着せて王の嫌疑を逸らせ、王に取り入って、自由に王妃に近づく許しを得たが、その嘘に気付いたカルロスがエーボリ公女の許に駆けつけ、王妃に警告するよう頼んだので王子を監禁した、だがもはや万策尽きた、これからブリュッセルに逃れる、という手紙をオラーニエン公に...、そこまで聞いたカルロスはあわてて相手を遮る。(以下 C=カルロス王子 M=Marquis Posa)

C. まさか郵便に出しはしなかっただろうな、フランドル行きの手紙はすべて...

M. 王に引き渡される ... どうやら既に通信相タクシスはその務めを果たしたようだ。

C. 何たること! それなら僕は破滅だ(So bin ich verloren)!

M. 君がだって? どうして君が破滅なんだ?

C. まずいことになった。君も破滅だぞ。こんなとんでもない嘘(Betrug)を僕の父が君に赦すはずがない。おしまいだ! この嘘を彼は決して赦さない。

M. しっかりしてくれ、よく考えてみろよ。これが嘘だなどと誰が陛下に言うのだ?

C. (相手の顔を穴のあくほどじっと見据えて) 誰がだって? 僕がだよ(Ich selbst)。

(S.191)² [傍点引用者]

ポーザのみならず観客・読者もこのカルロスの反応には意表を突かれるのではあるまいか。カルロスはポーザの計略をまるで理解しない。王を誑かそうとするポーザの企てに恐

² Schiller, Friedrich: Don Carlos. In Sämtliche Werke Band 2 Carl Hanser Verlag München 1985, S. 191. 以後この作品からの引用はすべて同書による。S の後にページ数を記す。

れ戦き、企んでいるのは自分ではなくポーザなのに、「僕は破滅だ」³と言う。ポーザ、カルロス、王妃以外にはこれが嘘と見抜ける者はいないのに、そんな嘘を王が赦すはずがない、その大嘘によって自分もポーザも破滅だとカルロスは怯える。「これが嘘だなどと誰が陛下に言うのだ?」と訊くと、「僕がだ」と答える。「フランドルのために生きのびてくれ! 王国こそ君の使命だ。僕の使命は君のために死ぬことだ」(S.192)と熱く説かれても、僕たち二人で手を取り合って国王の前に歩み出よう、あれは友人が友人のためにやったことだと王の人間性に訴えれば、きっと国王は感涙にむせび、自分たちを赦してくれると、あくまで正直を貫いて王の赦しを得るという姿勢をカルロスは変えない。

ドラマが終盤に差し掛かった重要な局面での、このあまりにも意外なカルロスの反応をいったいどう説明したらいいのか。こういう不可解と思える箇所は他にも幾つかあるが、その謎に挑むというのが拙論の課題である。

1. 熱狂的理想主義と〈他者の壁〉

啞然とするしかないカルロスの反応には理由が二つ考えられるのではあるまいか。

一つは父親に対するカルロスの無限の恐怖心である。第1幕第2場、ポーザとの再会の際にカルロスは、ポーザの口から「お父上」という一語が漏れた途端「何てことを! どうしてあの人のことを思い出させるんだ。良心の呵責という言葉なら千度言ったってかまわないうが、僕に父という言葉は口にしないでくれ(Unglücklicher!/Warum an den mich mahnen?/Sprich mir von allen Schrecken des Gewissens/ Von meinem Vater sprich mir nicht.)」と言い、「僕は父を憎んでいるわけじゃない...父という恐ろしい言葉を聞いただけで背筋が凍る、罰せられるんじゃないかって不安に怯えるんだ(Schauer/ Und Missetäters Bangigkeit ergreifen/ Bei diesem fürchterlichen Namen mich.)」「有無を言わず服従させる奴隷教育(eine knechtische/Erziehung)」を受け、六歳の時初めて父に、あの恐ろしいお方にあったが、「その朝あの人とはこともなげに四通の死刑執行令にサインしていたのだ。この時以来僕があの人に会うのはいつも僕が過ちをしでかして罰を受ける時だ」。(S.18f.)

「良心の呵責」より恐ろしい存在云々とは父に対する理屈を超えた罪悪感・恐怖心のことであろう。悪いことなどしていないのにいつ何時罰せられるかもしれないという恐怖、だから王(父)を謀^{たばか}らんとするポーザの偽手紙・嘘はカルロスにとっては自分が犯したも同

³ 4703 行目の So bin ich verloren について Pörnbacher は、よく分からぬとしながら、たぶん友人ポーザが破滅することによって我が身もまた破滅だと言いたいのではないかと説明している (Pörnbacher, Karl: Erläuterungen und Dokumente zu Friedrich Schiller Don Carlos, Stuttgart 1995, S. 68)。だが、このような解釈では劇の緊張感が失われるのではないだろうか。

然の罪、即罰せられるべき犯罪なのだ。⁴ 父親を前にすると身が竦んで、これは嘘ですと自ら進んで白状してしまう、自白しないではおれない、そんな恐怖感に囚われている。これがカルロスの心理というか、病理であろう。ポーザは別の関連で、自分はカルロスの心(がどういう動きをするか)を忘れていた(S.184)と言ったが、彼はここでも読み違えていた、他者の壁に突き当たったのである。

これこそシラー文学の真骨頂、驚嘆すべき人間心理洞察家シラーの面目躍如と言うべき箇所ではないだろうか。一見謎のようなこういう場面こそおもしろい。

さて、もう一つの理由だが、それはカルロスの度し難い正直さである。父王に対する無限の罪悪感と根が一つかどうかは分からない。以下、脇役ではあるがドラマの進行に欠かせぬ役割をはたすレルマという人物と絡めてこの問題を論じたい。

ポーザは自分の理想を実現するために周到な計略を練ることの出来る伶俐な頭脳の持ち主だが、その計画が挫折する原因の一つは、王の部屋でカルロスの紙入れを見たというレルマのカルロス王子への注進である。ポーザはUnglückliche Dienstfertigkeit「彼の忠勤は不運でした」(S.189)と言い、「そんなこと誰に予見(voraussehn)できたでしょうか」(S.185)と言っている。もう一つの要因は王子の「心を忘れていた(ich vergaß dein Herz)」(S.184)ことだ。レルマから話を聞いた王子は、ポーザが自分を見捨てるにしても、それはきっと天下国家変革のため王に自分カルロスの秘密(エリーザベトからの手紙)を売り渡し、改革実現のための権力を手に入れるつもりだったにちがいない、自分が犠牲になるのはかまわないが王妃までも一緒に巻き込まれるなどあってはならない、そう思い込んだカルロスは、最も避けなければならない相手エーボリ公女に助けを求めようとした。そういうカルロスの心の動きまでは「読めなかった(nicht vorhergesehen)」(S.184)とポーザは言っている。他者の壁が二つあったわけだ。

レルマは王を警護する近衛連隊の長であるが、現体制に批判的で、カルロスによる新時代の到来に期待を寄せている。そういうレルマが王子の親友ポーザが親しく王に接近するのを見て不安に駆られ、カルロスの大切な紙入れを間にポーザと王が何やら密談しているのを見て不審の念を抱いたとしても不思議はないのかもしれない。しかし作中ただレルマ一人だけは「私心のない(uneigennützig)」⁵人物だと言うのはどうか。邪心という程ではないにしても、皇太子の寵をめぐって王子と親密なポーザを密かに嫉妬し、ライバル視しているフシがなくもない。

しかしたとえそういう事情があったにしても、宮廷世界に生きるいじょう他人の言動の裏を、更に裏の裏を読む訓練を日々積んでいるはずである。注目すべきはポーザがレルマ

⁴ 少年時代にカルロスがポーザに代わって罪を負い罰を受けたのも、自らが説明する動機(S.19)以外に、もう一つこのような心理が働いていたとも考えられる。

⁵ Alt, Peter-André. ebd. S. 443.

について „Der Mann hat lügen nie gelernt.“(S.185)と言っていることで、あの男の正直ぶりはつける薬がない、という意味であろう。この *nie* からはポーザの苦りきった内心が読み取れる。本心を明かさず、心にもないことを言い、シバイをし、仮面を被る、これは宮廷で生きて行くために不可欠の悪徳だが、それがレルマには身についていない。本来ならポーザの行動の背後に何か意図が隠されているのかもしれないと、しばらく動静を見守り、真意を探る努力ぐらいはすべきである。レルマの行動はあまりにも直截、軽すぎるではないか、そういう不満、批判をポーザは言いたかったのであろう。

ちなみに『トーニオ・クレガー』の一節で有名な「王様がお泣きになった(Der König hat/ Geweint.)」(S.181)を最初に皆に告げ知らせるのがレルマであるのは偶然ではない。絶対専制君主が泣いたなどということは本来内密にしておくべき事柄であろうが、見聞きしたことを後先も考えずそのまま正直に報告するのがこの人物の特性のようだ。

興味深いのはカルロスについてもレルマについてとほぼ同様のことが言われていることだ。„Heucheln konnt er nie.“ (S.81) --- そう言ったのはアルバ公爵。嘘偽りも言えず、シバイもお出来にならないお方、とタカをくくられているのである。第2幕第6場でカルロスが王妃を前にして見せた態度の豹変ぶりにアルバが不審の念を抱き、これはきっと背後に何かあるぞと怪む。その時の印象をドミンゴに話す場面(第2幕第10場)である。カルロスとレルマとが気心を通じ合うのも無理はない。年の差はあるが痴呆的純心という点で二人は双子みたいに似ている。

ポーザがカルロスから紙入れを預かる際、君が持っていると言っていると盗まれるかもしれない、危険だから俺が預かると言っただけで、企みの中身をカルロスに伏せておくのは、正直というカルロスの美德と父親コンプレックスを知っていて、怖れたからである。すべてを知らせておけば行き違いは起きずにすんだかもしれないが、*naiv* なカルロスに知らせれば、ポーザの計略、嘘とシバイに耐えられず、恐れ戦いて反対しただろうから、それ以上の計画遂行が不可能になったかもしれない。この時のポーザはそれを予感できたから秘密にしたのであろう。だが偽手紙の時は追い詰められた状況にあって、そのあたりのことまで慮る余裕がなかった。第5幕第3場、ポーザの偽手紙の中身を聞かされた時のカルロスの反応はポーザにとっても驚きだったのである。

2. エーボリ公女の勘違い、カルロスの思い込み

エーボリがカルロス王子に恋文を書いたのは、彼女が王子を好きなだけでなく、王子の方でも彼女を愛していると思ったからである。エーボリは王妃の傍近くに仕える女官であり、密かに王妃に向けられた王子の愛の眼差しや身振りをてっきり自分に対するものと勘違いしてしまったのだった。

彼女は気に染まぬ相手との政略結婚を迫られており、国王からは夜のお召もかかっていて、鬱陶しい状況にあった。思いあまって部屋の鍵まで添えて付け文をしたのにはそういう事情もあったのだが、カルロスを憎からず思い、彼からも慕われているという思い込みがなければ、これほどまでに思い切った振る舞いに及びはしなかっただろう。

一方カルロスがこの手紙を王妃からのものと思いつくのは、手渡されたのが王妃の部屋の前の廊下であり、手渡したのが王妃に仕える小姓だったという偶然が作用している。そのうえ手紙には、王妃の館の裏部屋への鍵を使えば「長いあいだ眼差しやしぐさだけに語らせてきた思いを憚るところなく語りあえます。臆病なお方の願いは聞き届けられ、つましく耐え忍ばれたお方に素敵な報いが待ち受けております」(S.54)と書かれてあった。

それにしても、あの慎ましく凜としたエリーザベト妃がこんな大胆な手紙を寄越すだろうか、しかも鍵まで付けて。「あの方がお書きになったものはまだ見たことがない(Noch hab ich nichts von ihrer Hand gelesen)」(S.54)、つまり、エリーザベトの筆跡は知らないカルロス言っている。しかし彼女となら婚約時代に何度も手紙のやり取りをして、その筆跡は知り尽くしているから、これが作者の勘違いだということは当初から指摘されていた。だがカルロスのこの思い込みがなければ、その後の筋の展開は成り立たないので、作者はミスを取り繕う必要を感じ、第2幕第15場で「確かに筆跡に見覚えはなかった。しかし(...) このカルロスから慕われていると言われれば、それはあのお方(王妃エリーザベト)以外にはありえないではないか。思いが叶う悦びに目も眩む思いで(Voll süßen Schwindels)僕はその場所にすっ飛んで行ったのだ。」(S.92)とカルロスに弁解じみた台詞を言わせている。軽率には違いはないが、彼にはそう思いつきたい事情があった。

エリーザベトはかつてカルロスの許嫁だった。それを父王が政略上の理由から自分で娶ってしまった。王子は父親によって愛する婚約者を奪われた。皇太子妃となるべき人が王妃に、王子の義理の母になってしまった。カルロスの思いは募るばかり。抑制のきかないほどに燃え上がっていた。王子の思い違いの背景にはそういう事情がある。

もう一つはカルロスの性格、痴呆的純情・純真。よく言えば、スレッカラシでない。王妃からの誘いの手紙と思い込んで舞い上がったカルロスは、今朝ほど王にぜひフランドル遠征の指揮官にお願い出て拒否され、全権は既にアルバ公爵に委ねたと言われて落ち込んでいたのも忘れ果て、フランドルなど彼の念頭から消え失せてしまう。多幸感(Euphoria)に包まれたカルロスは出くわしたアルバ公爵を些細なきっかけで刺激・侮辱して互いにサーベルを抜き放つ事態となるが、王妃が姿を見せるや否や態度を一変させて公爵の手を取り赦しを乞い、そそくさとその場を立ち去る。後に„Heucheln konnt er nie.“ (S.81)とアルバ公爵に言われるきっかけを作ったのがこれだ。「ウソ偽りの言えないお方」というのは宮廷では軽蔑を込めた陰口である。

それぞれ間違った思い込みに導かれたエーボリとカルロスの出会いは緊張に満ちていると同時にコミカルでもある。ケラーなら一篇の滑稽譚に仕上げるだろう。しかしこの芝居

での両者はすれ違ふと言うより、むしろこそすれ違ひとも言うべき激しさで、車なら双方ドアが剥がれる程のダメージを受けながらの接触事故である。

だが痛みを感じるのはエーボリの方だけ。せっかくのお膳立てを足蹴にされたうえに王からの秘密の手紙までも取り上げられてしまった美女の屈辱と恨みは計り知れない。これが以後の筋の運びを決定づける。苦杯を飲まされた女の勘と執念で、カルロスの愛の眼差しと身振りが向けられていた相手は自分ではなく王妃であることに気付き、二人への復讐を開始する。先ず王の誘いを受け入れることで王妃を出し抜き、裏切り、王妃の手文庫からカルロスの手紙と肖像の描かれたメダルを盗み出してドミンゴとアルバに手渡す。反王妃・反王子の陰謀に加担するのである。

一方カルロスは相手に恥をかかせ恨みを買ったことにまったく気付いていない。こういう形で女の誇りを傷つけるということが何を意味するか、どんな結果を招くかがまるで分かっていない。「エーボリは君の心中を見抜いた。疑う余地はない、君の恋の秘密を底の底まで知ってしまった。君はエーボリをいたく侮辱したのだ。しかも彼女は王を自由に操ることが出来る身だぞ。」(S.93)とポーザに言われても、カルロスはエーボリを天使、淑徳の誉れと弁護する。エーボリの徳は天性のものではなく無理をして勝ち取った付け焼刃のものにすぎぬ、そのような女が恋い慕う自分を素通りして、こともあろうに王妃に、義理の母に禁断の愛を捧げるカルロスを見て何も仕返しをしないとでも思っているのかとポーザは言う。ポーザが最も恐れるのはエーボリに恐ろしい秘密(カルロスの王妃エリーザベトへの恋)を握られてしまったのではないかということである。しかしエーボリを天使だとするカルロスの思い込みは最後まで変わらない。

第4幕第15場でレルマから、王の部屋でカルロスの紙入れを見、ポーザと手紙のことを何か話しているのを耳にしたとの注進を受けた王子は、天下国家の改革と引き換えにポーザがカルロスの秘密を王に売り渡したのだと思い込む。自らの破滅は甘受するが、あの手紙によって王妃の身に危険が及ぶのは堪え難いと、唯一信頼するに足ると彼が今もって信じて疑わないエーボリの許に駆けつけ、身を屈して王妃への取次ぎを乞う。悪い予感に駆られて飛び込んできたポーザは王子の口からエーボリに重大な秘密が洩れたと思い込み、これ以上の軽挙妄動を封じるべく王子を逮捕し、知りすぎた女エーボリに短刀を突きつける。最初抵抗するエーボリだったが、目の前で起きた王子の逮捕が王の署名入り逮捕状によるものであることにショックを受け、自分が王妃の手文庫から盗み出した手紙が原因だと思い込み、事の重大さに身震いして王妃の許に駆けつけ、手文庫を破ったことだけでなく、王の求めに応じて身を許したことまで、すべてを告白する。自責の念に苛まれて半狂乱に陥ったエーボリは、修道院行きを命じられた後も、手紙の一件を含めてすべてが陰謀によるもので、王子と王妃の仲に関して王は騙されているのだということを直接王に訴えるべく必死の試みをするが、謁見は許されない。彼女がここで告知らせようとしていることはすべてポーザの策略によって既に王には知らされているのであるが。

エーボリが王からの「恋文」をカルロスに奪われたのも、彼が既にこの秘密を掴んでいて勘違いして気を許したからである。カルロスは、王に裏切りの証拠があるいじょう、王妃の行動を縛るものはもはや何もないと、この手紙を手に入れて小躍りするが、ポーズは王子のはしたなさをたしなめて、目の前で手紙を破り捨てる。

エーボリからカルロスへの恋文、王からエーボリへの文、王妃の手文庫から盗まれた王子の手紙、王子の紙入れにある王妃からの手紙、最後にポーズの偽手紙、これらがドラマの中で重要な役割を演じ、さながら手紙の悲劇とでもいうべき様相を呈するが、それらの手紙を巡る登場人物たちの必死の思い入れ、思い込み、思い違いが劇を盛り上げる。

3. 逸るポーズ、王の誤算

王子に対しては常に冷静なメントールの役割を演じ続けるポーズだが、彼もまた逸る気持ちからの思い込み、思い違いから自由ではない。モラリスト(人間性探究家)としてのシラーの冷徹な眼差しはポーズにも向けられている。

第3幕第10場での王の謁見の後、第4幕第3場で「王の使い」と称してポーズがやって来た時、王妃は信じがたいことだ、王と侯爵が会って議論するなどとは、それほど大きな不思議はないと言う。対してポーズは「私の信念を陛下に吹き込むとしましても驚くにはあたらずではないでしょうか」と言うが、王妃は「いいえ、侯爵様。冗談にもせよそんな子供じみた思い込み(Unreife[n] Einbildung)をあなたがなさろうとは思いません。実りのない企てに手を出すような夢想家(Träumer)ではいらっしゃいません。」(S.133) [傍点引用者]と答える。

だがポーズは有名な第3幕第10場で、思いがけず用意された王フィリップ二世の謁見に臨んで、どういうご用向きかは分からぬが「熱い真理を一かけらにせよ思い切って専制君主の心に投げ込んだなら、神の計らいによってどんなに豊かな実を結ばないとも限らぬではないか」(S.117f.)という「子供じみた思い込み」に捕らえられて、専制君主を相手に自らの理想を熱く(feurig)語る。王は半ば感嘆し半ば呆れてポーズを「風変わりな夢想家(Sonderbarer Schwärmer)」と言い、「逸る若者(Jüngling, der sich übereilte)の意見には国王としてでなく熟年者として従うわけには行かない」。「この話はこれで終わりにしよう、お若い。そちもおれのように人間を知るようになれば考えも変わるだろう(Nichts mehr/Von diesem Inhalt, junger Mann. – Ich weiß/Ihr werdet anders denken, kennet Ihr/Den Menschen erst wie ich.)」と言ってポーズの情熱的な長広舌に終止符を打つ。(以上 S.126ff)

しかし孤独な王は、他の廷臣と違ってまったく媚び諂うこともしない、地位・役職も求めないポーズに全幅の信頼を寄せ、夫として父親としての私的な悩みを打ち明けて妃と王子の仲を探るよう彼に命じる。そのための全権を与えるという。「そちは自分のために何一

つ求めなかった。(…) 私利私欲でそちの目を惑わされることはあるまい。」(S.130)私利私欲は *Leidenschaft* の訳であるが、*Leidenschaft* と言えばポーザには理想への情熱がある。彼は絶対専制君主を前にしてさえ怯むことなくあれほどの熱を込めて(*Feuer, feurig*)、スペインに思想の自由を、フランドルに独立を、人民に平等の権利をと説いたではないか。欲得には多少の後ろめたさが伴うが、理想への情熱には疚しさが無い。その分ブレーキがかからない。欲得などよりはるかに始末が悪い。そのような情熱に支配されている人物に絶大な権限を委ねれば、それがどんな大それた企てに利用されるか知れたものではない。君主たる者当然その危険を予知して然るべきだったろう。

しかしフィリップ二世は用心しなかった。彼の誤算はどうして生まれたのか。一つには彼は信頼できる人間に飢えていたのである。周囲にいる臣下たちは皆自己保身に駆られて媚び諂ったり、ライバルを陥れるために中傷讒誣することしか念頭にない佞臣たちばかりだったから、地位も要求しない、褒賞も求めない、絶対専制君主の前に出ても怯むことなくただひたすら理想を説いて実現を迫る、ポーザのような真っ直ぐな人間は初めてだった。第二に、アルバ、ドミンゴ、エーボリらによって、妃と王子の仲について疑いを吹き込まれ、疑心暗鬼に陥っていた。もともとエリーザベトは王子カルロスの許嫁だったのを政治的な計算から自らが娶った。齢も親子ほど違う。そういう引け目と疚しさがあるところにつけこまれたわけである。王はどうしても真実を知りたかった。そこに公明正大なポーザのような人物が現われたのだ。全幅の信頼を寄せたくなるのも無理のないことかもしれない。ちなみにアルバとドミンゴは革新的な王子、王妃に実権を握られると地位が危ないので、二人の仲を中傷し、個人的な恨みを抱くエーボリを抱き込んで、彼女が盗み出した手紙を証拠に王の猜疑心を煽ったのである。そのような事情を王は薄々は感じていたものの、疑念は晴れずどうしても真相を突き止めたかった。

火のような熱弁をふるって天下国家の改革を進言したのに、その相手から、こともあろうに不倫調査の依頼を承るとは!? ポーザの落胆がいかばかりだったかは想像に難くない。„Kann ich es mit einer/Erfüllten Hoffnung? –dann ist dieser Tag/Der schönste meines Lebens.“ (S.131)と彼は言う。この返事は謎である。邦訳は二つとも「わたくしの希望をおいれくださったうえでのことでございましょうか? --- それならば今日はわたくしの人生での最良の日でございます」。⁶ 確かにそうとしか訳しようがない。佐藤はこのままでは分かりにくいと見て、「今よりのち、王は人間に対し世に対し、寛宏な態度を取ってくださると期待してよいかという意」⁷と注を付けている。だがポーザの希望を容れる余地などまったくないことは先ほど終わった対話ではっきりしたばかりである。

⁶ 『ドン・カルロス』北通文訳 筑摩世界文学大系 18 シラー 1959 所載 315 頁。

⁷ 『ドン・カルロス』佐藤通次訳 岩波文庫 2005[1955] 269 頁。

この文章についての筆者の推理は、本来なら接続法第二式で言いたかったことを、ぶしつけになるのを避けて咄嗟の判断で直接法にした、そのために不得要領な文章になってしまったのではないか、ということである。„Könnte ich es mit einer erfüllten Hoffnung, dann wäre dieser Tag der schönste meines Lebens.“ これなら分かる。ポーザの正直な気持ちはそうであつたろう。しかしこの文章では恨みがましく未練たらたら、王への批判をも含み、失礼である。ポーザは一瞬の気転で直接法にして、更に ? --- を挟み、得体のしれない文章にして本心を誤魔化した。接続法第二式は直接法のぶしつけを和らげるために使われるというのが学校文法だが、常識が常に正しいわけではない。

ポーザは王が王子カルロスの許嫁だったエリーザベトを奪ったことも、恋人を奪われたカルロスのエリーザベトへのいや増す思いも、更には王が女官エーボリに宛てて書いた恋文、つまり王妃への裏切りも承知している。浮気調査など引き受ける気になれないのは当然だが、探らなくても実情は知り尽くしている。絶対専制君主には表向きノーとは言えないので、選ぶ道はただ一つ面従腹背である。彼は密かに「謀反(Rebellion)」(S.136)の計画を練る。手に入れた信頼と権限を活用して理想の実現に突き進むのである。

第4幕第3場でポーザが王妃に語る場所では、王子カルロスが密かにブリュッセルに赴き、スペイン皇太子として反乱軍の先頭に立ち、歴戦の名将オラーニエンやエグモントの指揮のもとフランドルの独立を勝ち取る。更にその武力を背景にしてスペインに自由の実現を迫る。王子の説得は、王子が絶対的な信頼を寄せる王妃にお願いしたい。王妃も協力を約束する。これが「謀反」の内訳であり、この構図は最後まで変わらない。

「謀反」に関する新しい動きは第4幕第5場に出て来る。ポーザがカルロスに王妃からの手紙(第4幕第3場でポーザが王妃に頼んで書かせたもの)を届けた際に、カルロスから紙入れを預かって王の許へ持参する(第4幕第12場)のである。王子には「絶対人手に渡ってはいけない」(S.142)ものなので自分が預かっておいた方が安全だとだけ説明する。問題は(婚約中の)エリーザベトからの手紙(特にアルカラでカルロスが重病になった時にエリーザベトが寄越したお見舞いの手紙)である。ポーザはそういう危険な手紙をあらかじめ抜き取っておいて、エーボリからカルロスへの例の恋文をわざと目につきやすいところに挟んでから、王の「信頼に対する見返し」と称して王に手渡す。「王は私を信用して大事な秘密を打ち明けてくださった。その信頼には感謝をもって応えねばならぬ(Der König glaubte dem Gefäß, dem er/Sein heiliges Geheimnis übergeben, /Und Glauben fordert Dankbarkeit.)」(S.144)とポーザは言うが、額面通りではない、ヒネリを利かせるのである。ポーザの思惑通り王はそこにエーボリの手紙を発見して「怪しからん裏切り」と言い、「わしは恐ろしい奴らの術中にはまっていた。この女だ、この女が妃の手文庫を破ったのだ、最初に嫌疑を吹き込んだのもこの女だ。(中略)わしは恥知らずな陰謀によって欺かれているのだ」(S.154)と、王妃の不倫疑惑がエーボリやドミンゴらによる中傷であることに王は気付かされる。

ポーザは、王妃と王子の間に秘密の了解があったとしても別の種類のもので、王妃には

政治的野心があり、「フランドル行きは殿下のご希望はお妃さまのお考えによっている」と言い、色恋などよりもっと危険なことが起きる恐れがあるので「より厳しい警戒が必要」である、王子には「頼もしい味方がたくさんついており、フランドルの叛徒とも通じておられ、まさかの時にはどんな思い切った行動に出られるやも知れず、それに対して速やかな対応が取れるよう準備が必要」なので、「危急の際に行使できる逮捕状」をと、王の署名入りの逮捕状を取り付けることに成功する。(以上 S.154ff)

逮捕状は万一の場合に敵対勢力の攻勢から王子の身を安全に確保するために必要だとしても、なぜポーザは敢えて自らの計画を半ばバラすようなまねをするのか。これは二重の陽動作戦であろう。「味方の作戦を秘匿し、敵の注意を逸らすために、ことさら目立つように本来の目的とは違った動きをする」(大辞泉)、それが陽動作戦であるが、ポーザの狙いは一つには王子と王妃の仲に関する疑惑から王の目を逸らせる、もう一つはカルロスのブリュッセル行きについては自分が警戒の目を光らせていると言えば、ポーザを信頼しきっている王をその件に関して油断させることが出来る。まさに一石二鳥の戦略である。ここまでは順調に計画が進む。

4. 破局の幻想

ところがそのポーザ侯爵が同じ第4幕の第21場になると顔面蒼白となって王妃の前に現われ「大胆な賭け」に「敗れた」と告白する。「誰に命じられたわけでもない、私一人の判断でのか反るかの大勝負に出て、すべてを賭けたのでございます。大胆不敵にも天を相手に勝負を挑んだのです。全知の神ならぬ身でありながら不遜にも運命の重たい舵を操ろうとしたのです。こうなるのも当然でした。」(S.170f.)

いったい何事が起きたというのか。大胆極まる「賭け」とはいったい何を指しているか。その賭けに敗れたとはどういうことか。既に述べた通り第4幕第15場でレルマからの注進を受けた王子は、問題の手紙(婚約時代のエリーザベトの手紙、特にアルカラで病床にあるカルロスへの手紙)を王に握られたことで王妃の身まで危険に曝されると思い込み、今なお信頼し切っているエーボリの許に駆けつけ、彼女の前に身を屈して王妃への取次ぎを乞うのだが、不吉な予感に駆られて飛び込んできたポーザは王子の口からエーボリに重大な秘密が洩れたと思い込んで、これ以上の軽挙妄動を封じるべく王子を逮捕し、知りすぎた女エーボリの口を封じようとする。

だがここで不可解なのは、なぜポーザがエーボリをそれほど危険視するのかという点である。たとえ彼女がカルロスの告白を聞いて知りすぎた女になったとしても、ポーザの抜け目ない策略によって既に彼女の正体はバレており、王の信頼を失っている。エーボリは無力化されており、毒を抜いたのはポーザ自身だったではないか。

第二に王子の口から重大な秘密が漏れたと言うが、エリーザベトからの危険な手紙はポーザの懷に保管されたままだし、告白すると言ってもカルロスがいったいどんな秘密を知っているというのか。王妃への恋について既にエーボリは王子との不幸なすれ違いの体験からそのことに勘付いてしまっている。それはポーザ自身が指摘していた。密かにフランドルへ赴きそこで反乱軍の先頭に立つという計画は王妃の口から告げられるはずであるが、まだ王妃との面会が行われていない現段階では王子は何も知らない。王子の口から洩れると破局に繋がるような情報は何一つないのである。

この不整合に関しては作者自身が気付いていたと思われる個所がある。第5幕第3場でポーザがカルロスに逮捕の理由を説明する時、「ありもしない危険を吹き込まれ」「ただ一人の友に捨てられたと思ひ込んだ君はエーボリの腕に飛び込んだ、悪魔の腕とも知らずに。この女こそ君を欺いた張本人なのに。僕は君があの子のところへ走っていくのを見た。悪い予感が僕の胸をかすめた。僕は君の後を追った。遅すぎた。君はエーボリの前に身を投げ出し、告白していた。君にもう助かる道はなかった(Das Geständnis/ Floh über deine Lippen schon. Für dich/ Ist keine Rettung mehr.)」カルロスは慌てて「違うよ! 違う, そうじゃないよ!(Nein! Nein!)」。観客・読者はこの後にどんな台詞を期待するだろうか。「僕は告白なんかしてない。秘密なんて漏らしてないよ, いったいどんな秘密を漏らしたって言うんだ」ではあるまいか。ところが、「彼女は同情してくれたんだ。君は思ひ違いしているよ。ほんとに彼女は同情してくれたんだ(Sie war/ Gerührt. Du irrst dich. Gewiß war sie/ Gerührt.)」。(以上 S.189f.) 見事なカタスカシと言うべきか。

たしかにカルロスの眼から見ればポーザはエーボリに関して「思ひ違い」をしている。しかし問題は直前にポーザが口にした「告白(Geständnis)」である。この「告白」云々に関しての「思ひ違い」の方がはるかに重大なはずではないか。実際にカルロスはあの場面でも何も告白などしていなかったから、告白した、重大な秘密が君の口から洩れたと言われれば、真っ先に否定すべきはその点についてでなければならないはず。カルロスがズレているのか、それとも作者が意図的にハグラカシなのか。

ここで二人の会話が噛み合って、話が繋がると、ポーザの信じられないほどの「思ひ違い」が明るみに出てしまう。カルロスの口から重大な秘密が漏れて万事休した、カルロスを救うために女の口を封じるか、それとも自分が囹となるための偽手紙によって宮中を混乱に陥れ、その隙をついてカルロスをブリュッセルに逃がすか、という切羽詰まった選択を迫られているというポーザの思ひ込みが根拠のない幻想であることが明らかになる。そうすると、既に終局に向けて動きだしている劇の進行が空中分解してしまう。そのことに気付いていた職業劇作家シラーが、もともとズレたところのあるカルロスにわざとピント外れの台詞を言わせることによってポーザのとんでもない思ひ違いという重大な真実を覆い隠すべく巧みなハグラカシをやった、これが真相ではあるまいか。冷静に見るなら、ポーザがここで言っていることに対応する客観的事実はない。だがこの気違いじみた思ひ違

いなければ悲劇は成立しない。この不可解な思い込みという不整合の上にこの芝居は成り立っている。シラーが必死に隠そうとしたのはそのことではないか。

それにしてもあれほど怜悯なポーズにあって、もしこんな耳を疑うような思い込みが可能だとしたら、背後にいったいどんな事情、どんな情念が潜んでいて、彼の判断力を狂わせたと考えられるか。思い当たる答えがあるとすればただ一つ、第4幕第21場での王妃の言葉だけである。「貴方はご自身で崇高とお呼びになるこの行為(カルロスの身代わりとなって死ぬ)に飛び込んで行かれたのです。(中略) 私には貴方というお方が分かっています、貴方はずっと以前からそれを渴望なさっていた、たとえ幾千の心が千々に裂けようとも、ご自分の誇りさえ満たされればそれでよいのです。(中略) 貴方はただ人から褒め称えられることだけを願っていたのです(Sie haben/ Nur um Bewunderung gebuhlt.)」。ポーズは「たじたじとなって(betroffen)」「まさか! そんなお言葉を聞かされようとは---」(S.176)と絶句するが、王妃の言葉は正鵠を射ている。

作劇上のミスでないとして、ポーズの不可解な思い込みを説明し得るものがあるとすれば、ここにエリーザベトが刳抉して見せた悲劇的英雄願望しかない。これがポーズを駆り立て、一時的な狂気に陥れたのだとでも言うほかあるまい。人間性への鋭い洞察力と裏腹に、現実のありのままを見誤る自己陶醉的な一面がポーズにはある。この熱狂的理想主義者は自らの理想を実現するためとあらば他人を道具として用い、カルロスなどはほとんど彼のマリオネットの感さえある。彼は王でさえ手玉に取り、王妃にも王子への思いを昇華させ理想の王国実現のための導きの女神となってほしいと願う。それに対して王妃は「貴方は私をあの方の天使とし、私の徳をあの方の力とせよと仰いましたが、私が女の弱き性から自由だと本気でお考えになっているのでしょうか。女の情念というものをそんな言い方で美化することが私たちの心にとってどれほど危険なことか、よくはお考えにならなかったようでございます」(S.175)と異議を申し立てている。『カルロス書簡』に言う理想主義者ポーズの Herrschsucht, Eigendünkel, Despotismus⁸とはこのことであろう。

彼はだが自ら悲劇的で崇高な筋書きを書いて、他人に押しつけて演じさせるばかりではない。自らが書いた台本を自分で演じる、自作自演の独り芝居という趣さえある。それがあの場面のとんでもない思い込み、思い違いとなって現われたと考えることができるかもしれない。ポーズの思い込みは現実に対応していないが、その宙に浮く言動にポーズ型熱狂的理想主義者の危うさが描かれているとすれば(作者の意図を超えているかもしれないが)、この箇所には深い意味が潜んでいると見る事が出来る。

⁸ Schiller, Friedrich: *Briefe über Don Carlos*. In: *Sämtliche Werke Band 2*, Carl Hanser Verlag, München 1985, S. 261.

おわりに 父殺しの試みと巨大な壁

「王様がお泣きになった」のは、監視の網に掛って届けられたフランドルへのポーザの手紙を王が読んで、信頼していたただ一人の人物に裏切られたと知ったからである。しかしその手紙に書かれていたのは偽の情報で、王が読んで騙されたことを嘆いたその手紙がこれまた王を欺くための嘘であった、王は二重に欺かれたのだ、このことを王に暴いて見せるのはカルロスである。カルロスの将来とフランドルとスペインの良き未来のためにポーザが命を懸けて打った大芝居の内幕をカルロスはなぜみすみすバラシてしまうのか。

王子がここでやろうとしたのは父親を徹底的に貶め、叩きのめすことによる父親の乗り越え、父親殺しの試みであろう。はずみで抜き身の剣を父親に向ける形になるのは偶然の成り行きではあるが、象徴的な意味を持っている。王はポーザに愛と友情を押し付け、彼を重用したが、ポーザは理想実現のために王を手玉に取り、自分カルロスへの友情のために王を裏切り、自分カルロスのために一身を犠牲にしたのだと言い、自分カルロスにとってのポーザのようなそんな友人がただの一人でも貴方にはいるか、いないだろう、自分は親子の縁を切る、王国を継ぐ気などないと宣言して、国王を追い返す。(S.195ff)

父親殺しは成功したか。カルロスは一人前の大人になったか。一人取り残された彼はポーザの亡骸の傍に虚脱状態で座り込んでいる。王妃からの使い(侍医メルカド)が来ても「大事なものなどもはやこの世にはない」(S.199)と無反応。だがポーザの遺言と聞いたとたんに生き返ったように立ち上がる。亡きポーザの霊に励まされる形で彼はようやく独り立ちするかのごとく。深夜に宮殿の廻廊を彷徨うと噂されている先帝の亡霊に身を襲し、僧衣をまとして王妃を訪ねる。これは王妃の発案であるが、それを受け入れてようやく王子が嘘・シバイ・仮面・変装・入れ替わりの領域に足を踏み入れる、というのも興味深い。自分をコントロールし、自分で自分を演出する余裕がないとこれは出来ない。「短い一夜で私は急に大人になったのです」(S.217)。しかし、エリーザベトへの私情を断って、ポーザが身命を賭した「謀反」計画の実行を誓うところで、異端審問所長官の命を受けた国王フィリップ二世によってカルロスは逮捕される。

王子は父王との肉親の絆を断って、精神の師であり第二の父ともいうべきポーザの志を継ごうとするが、その前に立ちはだかるのが宗教裁判所という巨大な壁である。これは現代アメリカCIA並みの情報収集能力を有し、世界の隅々まで監視の網を張り巡らして反逆・異端の動きを余さず把握し、ポーザの企みや、以前からの周到な準備さえも残らず調べ上げていた。高齢盲目の大審問官はポーザを異端裁判にかけて、しかるべく処刑するはずであったところを、断りもなく早まって殺害してしまったことで王を非難する。自由・革新の志を秘める王子ではあっても、肉親の情は断ちがたいと訴える父王に向かって「信仰の前では親子の情など無価値」と言い放ち、「集めた富をいったい誰に遺したらいいのか」と問う王に「自由のために遺すくらいなら朽ち果てさせた方がまし」(S.215)と言う。恐るべ

き原理主義の破壊的本性も、徹底した諜報活動によって謀反の動きを余さず監視して殲滅する異端審問所も、現代人にとって身につまされるリアルな組織で、その描写にもモラリスト(人間性探究家)シラーの慧眼が光っている。

このドラマの面白さは、政治劇か、理念劇か、家庭悲劇かといった議論を超えたところにある。演劇は音楽と同じく再現芸術である。普通Interpretationは先ず演出家・役者の仕事だが、Lesedramaの場合はもっぱら読者がこれを引き受けねばならない。劇作家は総じて小説家ほど親切ではないから、われわれは会話の微妙な陰影、駆け引き、綾、機微を読み取り、謎の呟きを解き明かすべく懸命な努力をしなければならない。ポーズが預かるカルロスの紙入れについての処置など、作中に明示的解説は見当たらない。しかし、こういう箇所を読み誤ると、このドラマ全体がわけの分からぬ代物となる。受容者は思い切り触角を伸ばし動めかしながら行間を読む努力をするしかない。

Der schwierige Text *Don Carlos*

Tomotaka TAKEDA

Prinz Carlos, der sich dank „Lermas unglückliche(r) Dienstfertigkeit“ irrtümlich von dem Einzigen (Posa) verlassen wähnte, wirft sich der Fürstin Eboli in die Arme, „in eines Teufels Arme“. Von einer schlimmen Ahnung getrieben folgt ihm Posa. „Zu spät./ Du liegst zu ihren Füßen. Das Geständnis/ Floh über deine Lippen schon. Für dich/ Ist keine Rettung mehr“. Dagegen wendet Carlos sofort ein: „Nein! Nein!“ Man könnte erwarten, dass Carlos dann sagen wird: „Nein! Nein! Ich habe kein Geständnis gemacht. Du irrest dich.“ Er hat nämlich Eboli nur gebeten: „auf meinen Knien/ Beschwör ich dich [...] laß mich/ Mit meiner Mutter sprechen.“ Dem „Nein! Nein!“ folgt aber „Sie (Eboli) war/ Gerührt. Du irrest dich. Gewiß war sie/ Gerührt.“ Schiller weicht unserer Erwartung raffiniert aus, oder will uns verwirren, um einen Defekt zu verhehlen. Bei Posas Glauben: „Zu spät./ [...] Das Geständnis/ Floh über deine Lippen schon. Für dich/ Ist keine Rettung mehr“ handelt es sich um eine irreale Einbildung. Erstens ist Eboli nicht mehr gefährlich, kein „Teufel“ mehr, weil Posa selbst sie demaskiert hat, indem er den König ihren Liebesbrief an Carlos in der Brieftasche entdecken ließ, sodass Eboli keinen Einfluss mehr beim König hat. Zweitens behält Posa Elisabeths geheimzu- haltende Briefe an Carlos in seiner Innentasche sicher und drittens von der „Rebellion“, an der Carlos teilnehmen soll, weiß er nichts, da die Besprechung mit der Königin noch nicht stattgefunden hat. Also keine bedenklichen Geheimnisse, die über Carlos' Lippen fliehen dürften. Posa hat keinen Grund zu sagen „kein Ausweg – keine Hülfe [...] Verzweiflung [...]“, auch keinen

Grund, den Falschbrief an Graf von Oranien nach Brüssel zu schicken und unterwegs abfangen zu lassen, um Zeit zu gewinnen und Carlos nach Flandern flüchten zu lassen, indem Posa selbst im Brief der Schuldige zu sein scheint und den König und den Hof in ein großes Wirrwarr stürzt. Ein Irrtum Schillers (wie Carlos den Liebesbrief Ebolis für den Elisabeths hält, denn „Noch hab ich (hat er) nichts von ihrer [Elisabeths] Hand gelesen“, was nicht der Fall ist.) oder eine Täuschung Posas? Wenn es nicht des Dramatikers Fehler ist, auf welche Weise könnte erklärt werden, wie sich solch eine kluge Figur wie Posa so etwas Falsches einbilden konnte? Die einzige mögliche Erklärung wäre die Äußerung der Königin: „Sie stürzten sich in diese Tat, die Sie/ Erhaben nennen. Leugnen Sie nur nicht./ Ich kenne Sie, Sie haben längst darnach/ Gedürstet – Mögen tausend Herzen brechen./ Was kümmert Sies, wenn sich Ihr Stolz nur weidet./ O, jetzt – jetzt lern ich Sie verstehn! Sie haben/ Nur um Bewunderung gebuhlt.“ Das könnte die irrealen Einbildung Posas, wenn auch nicht so überzeugend, leidlich begründen. In „*Briefe über Don Carlos*“ weist Schiller auf die Problematik des leidenschaftlich idealistischen Weltverbesserers hin. Dazu gehört m. E. auch die Täuschung hier. In diesem Stück wird auch Posa manchmal karikiert und kritisiert, indem seine Worte bald überschwenglich, bald abnorm klingen. Der Königin gegenüber spricht er kritisch von „falschem Heldenmut“, was aber hier ironisch wie ein Bumerang zu ihm selbst zurückfliegt und ihn trifft.